

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 渡辺 耕平 所属: 大分県立別府支援学校鶴見校 記録日: 2019年 2月22日

キーワード: 実態把握、観察、動きを引き出す、スイッチ

【対象児の情報】

- ・学年 高等部1年生(自立活動を主とする教育課程)
- ・障害名 ◎肢体不自由 ■重度重複障がい(普通高校在籍時の事故による脳挫傷、及びその後遺症)
- ・障害と困難の内容

| | |
|-----------|---|
| 生活の様子 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校に隣接するセンターに入所している、センターではベット上で過ごすことが多く、学校でも車椅子に乗った状態で過ごしている。経口で食事もあるが、胃ろうで水分や栄養を併用して摂取している。 ・母親がほぼ毎日面会にきている。高等部卒業後は自宅に帰ることも検討している。 |
| 身体の動き | <ul style="list-style-type: none"> ・全介助が必要。<u>全体的に体の動きがあまり見られず、自分の意思で動かしている箇所があるか不明、またはわかりにくい。</u> ・未定頸で首から下を自分の意思で動かすことは難しく、直角に近い態勢で座位をとると首が下がってしまうため、車椅子でやや上を向いた状態で保持している。 ・体格が良いため、頻繁に車椅子から降りすことは支援者が複数必要で難しい。 ・顔の向きが変わっている時もあるが、意図的かどうかわからない。 ・眼鏡を着用し、視野も狭いようであるが、視線を動かす様子も見られる。 |
| コミュニケーション | <ul style="list-style-type: none"> ・発語はなく、発声も「うー」など発生することがあるがあまりない。 ・<u>反応が少ないため、言葉をどの程度聞き取っているか、どの程度理解しているかはわからないが、人の声や音は聞こえていると思われる。</u> ・不快な表情を見せたり、泣いたりすることは現在のところない。 ・母親や教員が言葉をかけると笑顔になることもある。 |

【活動目的】

・当初のねらい

- (1) 動きや反応は少ないが、どのような刺激で、どの部分を動かすことが出来るのか、またどの程度動かすことができるのか記録し把握する。
- (2) 意図的に動かせる部分があるのであれば、自分からのアクションで外界に働きかけることにつなげていく。

・実施期間 2018年6月～2019年1月

・実施者 渡辺 耕平

・実施者と対象生徒の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象生徒の事前の状況(今年度実施者が担任になってから)

○高校生時の事故の後遺症で、病院でリハビリを経て本校に隣接するセンターに入所となる。現在もリハビリを行なっているが、本校にきてまだ1年弱であり、どのような時にどのような反応があるか、またどの程度自分の意思で動かせるのか教員も手探り状態である。

○母親が来て話しかけると口元がわずかに動いて笑顔を見せることや視線が合うこともある。後遺症障がいという事もあり、支援者の姿や話していることなど全く理解できていないわけではないと考える。しかし、どの程度理解できているのかこちらが読み取ることができず、どれも感覚的なものになってしまいがちである。

身体の動きについて

首から下は現段階では動きがないよう見える。視線や顔を動かすことがあるが、どの程度自分の意思で動かしているのかわからない。体を動かすことができないので自分でしたいことがあってもできない（外界に働きかけることができない）。

コミュニケーションについて

現段階では言葉を発することができない。将来的に支援者が常にそばにいるわけではない状況が予想されるが、自分で支援者を呼んだり、したいことがあったとしても伝えたりすることができない。

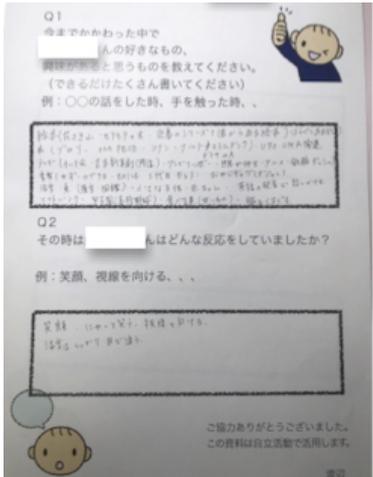
母親は、Sさんの回復を願ってほぼ毎日センターに面会に来ている。Sさんが話をできるように回復することが願いであるが、まずはその第一歩としての支援をしていきたいと思っている。現状のSさんは調子の良い時には笑顔や視線を向けていることも見られる。しかし投薬の関係で覚醒が低い時もあり、その反応はまちまちである。面会に来ている母親や、今後センターにせよ、在宅で生活することにせよ多くの人と関わりを持ち暮らしていく時に少しでも Sさんの反応、つまりどのような刺激に対して、どのような動きがどの程度出るのかが客観的になってくれば、Sさん自身も他者との関わりができてくると思われる。また、自分の好きなことができるきっかけになるだろうし、何より母親や支援者にとっても関わり方がより充実したものになるのでは無いかと考えこの実践を始めた。

・活動の具体的内容

Sさんの興味・動いている様子を探る

1-1聞き取り まず「聞き取りシート」を作成し記入してもらった。Sさんのことをよく知っているであろう前担任や昨年度関わった先生、母親にどのようなものが好きそうか、興味がありそうか、どのような場面で動きがあったか、どのような反応であったかを記述してもらった。

結果は以下の表の通りである。

| | Sさんが好きなもの、興味があると思うものを教えてください | その時Sさんはどんな反応をしましたか？ |
|----------|--|--|
| 昨年の担任 | アニメ（動画・マンガ） 腕の上下、肩回し、首回りのマッサージ、反面足はあまり反応がない 母親の泣き顔 | 笑顔を見せる 視線を向ける、じっと見ている 笑顔を見せたりあくびをしったりする |
| 昨年のクラス先生 | 女性の先生の面白い話をした時 Sさんだけ～できないという話をした時 | 両側の口角が上がってニヤマリしていた 悲しそうな表情をしたように見えた |
| 母親 | 絵本（花咲き山、モチモチの木、昔からある絵本、はらぺこあおむし等） 本（怪傑ゾロリ、ONE PIECE、コナン、Naruto、スラムダンク） テレビ（イってQ、吉本新喜劇、世界が仰天、アンビリバーボー、鉄腕ダッシュ、UFO、UMO など） 音楽（ゆず、コブクロ、EXILE、B'z、三代目） 親父ギャグ 活字（漢字・図鑑） 小さな子ども、赤ちゃん ソフトバンク、甲子園（高校野球） 食べること（甘いもの） 脇をくすぐる | 笑顔、ニヤッと笑う 視線を向ける 活字はしっかりと目で追う  |

この結果から、絵本、アニメやバラエティーなどの動画、歌手の歌、人の話などたくさんの好きなものが書かれていた。好きなものは事故に会う前のものと思われるものが多かった。また、反応の部分は今の状態での記述と思われるが、ニヤッとする、笑顔になる、顔を向けるなどの記述があった。

1-2iOAKによる記録 次に、Sさんがどのような刺激に対して、どのような反応（動き）が、どの程度あるのかを

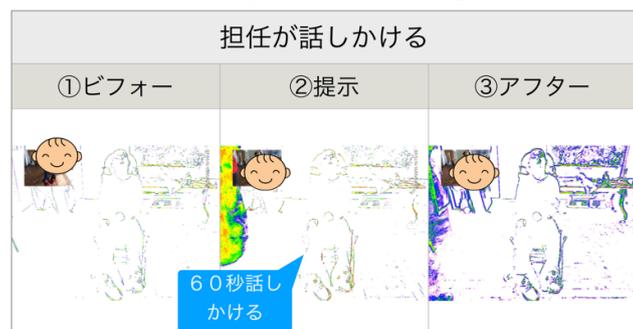


iOAKで記録した。iOAKは、人（モノ）の動きを可視化することができるアプリで、時間（秒）を設定して、その時間ごとの動きを定点観測的に撮影し、モーションヒストリーを記録することができる。撮影した画像は、動きが大きい箇所ほど色がつく（青系⇄赤系）。モーションヒストリーはわずかな動きも捉えることができるが、揺れなども感知してしまうため、iPadを三脚等でしっかり固定し撮影するようにした。撮影は教室の前方で、できるだけ他の刺激が入らない環境（毎回同じような環境、条件）で行った。聞き取りの情報を基に整理し、好きだったものや興味のあると思われる刺激「支援者の言葉かけ」「支援者が絵本を読む」「アニメなどの動画」「音楽を流す」など条件を変えて一定時間提示し、刺激提示前の（ビフォー）、刺激提示中、提示後（アフター）で撮影し、Sさんがどのような反応をどの程度示すのか把握していくことにした。Sさんの動きが全体的に少ないと予想されるため各撮影1コマ60秒と長めに設定した。刺激提示は動きを引き出すように、Sさんの体の左右からそれぞれ行った。



体全体を撮影

普段の様子や聞き取りから体はあまり動きが見られていないが、初めに体全体を記録してみることにした。そして刺激に対してどの程度反応が見られるか比較した。方法は、ここでは体の左右から交互に「担任が話しかける」「音楽をかける」を行いその反応を見た。下図のように記録された。



| | |
|----|---------------------------------------|
| 結果 | 若干笑顔になったと目視では感じたが、体全体の撮影では有為な動きはなかった。 |
| 考察 | 刺激に対しての意図的に手や足を動かすことは現段階では難しいようである。 |

手や足の動きについては、今後も継続して可能性は探って行きたいと思う。

顔に焦点をあてて撮影

そこで、聞き取りのエピソードや目視でわずかに変化が見られた顔にクローズアップしてiOAKで記録してみることにした。

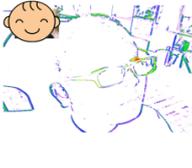
方法は、「前担任が言葉をかける」「全担任の姿のみ」「絵本を読む」「テレビの動画」「音楽の曲」などを提示して記録した。iOAKの撮影は1分ごとに行った。

※以下の画像「前担任が言葉をかける」「動画（アニメ）を提示する」「音楽を聴かせる」はいずれもSさんに対して右側から行っている。以降それぞれ他の刺激でも撮影しているがその都度左右入れ替えて実施している。

動画はiPadを三脚に固定して提示を行い「提示後（アフター）」ではiPad（動画）であれば三脚ごと見えないようにした。

前担任が話しかける

まずは、前担任がSさんの右側より話しかけた。

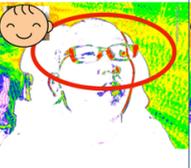
| 前担任が話しかける（姿および声） | | |
|---|---|---|
| ①ビフォー | ②提示 | ③アフター |
|  |  |  |

| | |
|----|------------------------------|
| 結果 | 笑顔になり視線を向けて、顔も少しずつ動く様子が見られた。 |
| 考察 | 人を区別できているのと感じることができた。 |

私が担任になってから実際に顔を動かしているのを見たことがなかったので、この実態把握で知ることができた。またこの段階では担任の私を見ても笑顔になることは少なかったなのでこの撮影人を区別できていることも知ることができた。

前担任の姿のみ

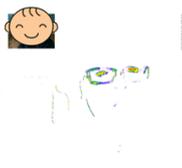
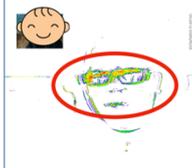
次に、姿のみの時はどうかと思い、前担任の姿のみで撮影した。

| 前担任の姿のみ | | |
|---|---|---|
| ①ビフォー | ②提示 | ③アフター |
|  |  |  |

| | |
|----|---|
| 結果 | Sさんの視界に入るとまず視線が先生の方を向き、ニヤッとして顔を向けようとする動きが撮影された。 |
| 考察 | このことからSさんは視覚情報のみでもしっかり姿を捉えていることがわかった。 |

絵本を読む

次に、Sさんが好きと記述があった絵本を読んでみた。絵本は絵と音で楽しむものである。

| 絵本を読む | | |
|---|---|---|
| ①ビフォー | ②提示 | ③アフター |
|  |  |  |

| | |
|----|--|
| 結果 | 提示すると視線を向け顔もしっかりと絵本の方を向けていた。絵本を読んでいる最中はじっと絵本の方を見ていた。さらに60秒して絵本を読むのを止め、視界に入らないようにすると顔を正面に戻す様子が見られた。 |
| 考察 | このことから顔を向ける必要がなくなったから正面を向いたのか、それとも絵本を探そうとすることもできるのかなと感じた。 |



テレビ番組の動画

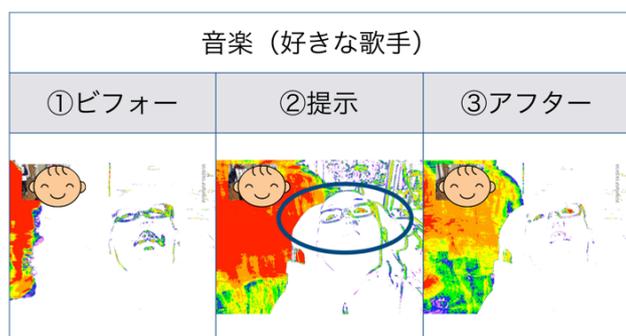
次に好きなアニメやテレビ番組の動画を iPad で提示した。ビフォーで60秒経過したのち iPad ごと視界に入るように提示した。



| | |
|----|---|
| 結果 | 視線を動かしてよりしっかりと iPad の方を向いていた。そして動画をしっかりと見ている様子であった。 |
| 考察 | このことを「前担任が話しかける」や「前担任の姿のみ」の時と比べると、人の姿は視界に入りやすく、声や雰囲気でも楽しむことができる。それに対して iPad は顔をしっかりと動かして向けないと見ることができない。そのことから人の姿に比べてしっかりと見るためには必要があるものは顔を動かしたのではと感じた。 |

音楽を流す

それなら、教員の声や音楽のみではどうだろうという疑問が湧いてきた。そこで今度は S さんの好きな音楽を聞かせることにした。



| | |
|----|--|
| 結果 | すると「ん？」という表情をして目はキョロキョロとした様子で、曲を聞いているようであるが、顔の動きはあまり見られなかった。 |
| 考察 | このことから音楽は音源を向かなくても聞くことができるので、顔を動かさなかったのではと考えた。 |

提示による左右の違い

以上の顔に焦点を当てた iOAK の撮影も左右それぞれに提示を行っているが、この実態把握の段階での左右に着目した動きである。



| | |
|----|---|
| 結果 | それぞれの提示で右側の方が大きく動いていた。左側も私が予想した以上には動いていたが右に比べ動きにくそうにしていることが多かった。刺激を提示すると視線は左を向けることも多かったが、それに合わせて顔を動かそうとほんのわずかに動かす様子が見られたがうまく動かないように見えた。 |
| 考察 | このことから S さんは現段階では右側の方が動きやすそうだということがわかってきた。一方で学校生活の中では担任が気づかないうちに左側を向いているときもあり、今回の実践では短時間に意図的に左側を向くことは難しい様子で、右側の方がより意図的に動きやすそうだと感じた。 |

1-3記録からわかってきたこと これまでの、iOAK での各刺激提示による記録の結果を表にまとめると以下のよう

になった。

| | 支援 (提示するもの) | 視線 (右) | 顔の動き (右) | 視線 (左) | 顔の動き (左) | 提示された時の表情 |
|----|----------------|-----------|-------------|-----------|-------------|----------------|
| 人 | 母親が話しかける | ++ | +++ | ++ | ++ | 笑顔になる |
| | 前担任の姿のみ | ++ | + | ++ | + | 笑顔になる |
| | 前担任の話しかけ | ++ | ++ | + | + | 笑顔になる |
| 音声 | 音楽を聴かせる | + | - | - | - | すました表情 |
| | 前担任の声のみ | + | - | + | + | 笑顔にはなる |
| | 絵本を読む | ++ | ++ | ++ | + | すました表情 |
| 映像 | 動画を提示 (アニメ) | ++ | ++ | ++ | ++ | すました表情 |
| | 動画再生前のiPadを置く | ++ | +++ | ++ | ++ | 動画が再生されると笑顔になる |
| | 肩をたたく | - | - | - | - | キョトンとした |

表からわかってきたことをまとめると以下のようになる。

| | |
|-------------------|---|
| 随意性について | ・母親や前担任などへの聞き取り、そして実践者が関わってから感覚的に顔や視線の動きがみられていた。しかしそれらの動きは今までは随意的に動かしているのかはうまく説明ができなかったが、提示によって動きが見られたものがあった。 |
| 笑顔・視線・顔の動き | ・人がそばで話しかけたり、好きな動画を提示したりした時は笑顔になることも多く、笑顔だけでなく視線を向けたり、顔をゆっくりであるがその方向に向けることができている。 |
| 顔や視線の動きの変化 | ・また、興味のあるものであれば顔や視線を向けるとしっかりと見続けること（動きが減る）ができることもわかってきた。 |
| 探索や期待について | ・さらに、人や提示したものが視界に入らなくなると視線や顔を動かして探すような行動や期待するような行動が見られることもわかってきた。 ・特に視界に入らないと見えないもの、必要性があるものはしっかり動かしてみようとするということがわかってきた。 |
| 提示方法について | ・現段階では顔を動かすのは右のほうがよく動きそうだ。 |

今回の記録からは以上のようなことが言えるのではないだろうか。今まで説明がつかなかった、感覚的なものがこの撮影・記録によって少しずつわかってきたような気がした。今回の観察から S さんがある程度意図的に顔や視線を動かしていることがわかってきた。さらに、観察や色々なものを提示する中で、まだ主観的なものであるが、動画も同じものを何回も提示すると S さんの反応が悪くなっているということもわかってきた。このことから S さんはある同じもの、違うものといったことがある程度理解できているのであろうともわかってきた。

そして、顔や視線をある程度意図的に動かすことができるのであれば、次の段階としてその動きを活用して S さんが主体的に外界へ働きかけることに繋げていけるのではないかと考えた。

Sさんの動きを外界への働きかけに繋げる

2-1動きを引き出していく取り組み、情報共有 学部で情報共有し、興味のあるものに視線や顔を向ける実践を繰り返していく。

今までの記録からわかってきたことを学部の教員間で情報共有した。また、普段の学校生活でも他者が見てSさんが自分で動いていることがわかるように笑顔や顔の動きを引き出すようにしていった。動きを引き出すために学部の教員に共通理解し、Sさんに話しかける時には斜め前方から話しかけるようにした。その結果、笑顔になることや、顔をしっかり向けることが多くなってきたと感じる。結果として、たくさんの先生が話しかけてくれることにも繋がり、話しかけた教員もSさんが反応している、動いていることを客観的に知ることができるようになった。Sさん自身がある程度確実にこうすれば視線や顔が動くということがわかってくれば、支援者もより反応がわかりやすくなり、Sさん自身の動きで支援者が近くにきてくれることはSさんにとっても嬉しいことである。



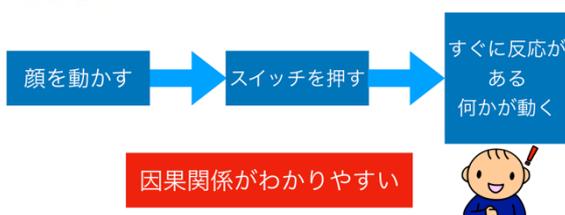
また、テレビ番組やアニメ動画などSさんの好きなもの、動きがよく出るものを提示する機会を増やし、視線や顔をしっかり動かすことを繰り返し行うようにした。学習や余暇でiPadを見る際にも斜めから提示して、「動く」ということを意識させるようにしている。提示する動画もSさんが興味を持てる視線や顔をしっかり向けたくなるような動画を提示するようにし、顔が動いたときには「しっかり動いたね」とSさんにフィードバックできるように言葉かけもするようにした。

ここまでの実践でSさんは、動きたくなるような、そして必要性のある環境を作ることで、笑顔、視線そして顔を動かすことがわかってきた。そこで、事故後自分の体を自由に動かすことができない、受け身的な生活だったSさんが、何か外界に働きかけることにつなげていけないだろうか考えた。自分の動きで何かができるようになれば嬉しいのではないかと考えた。

2-2スイッチの取り組み 反応や動きが見られる箇所にSさんに合ったスイッチを設置し、外界に働きかける。動画を再生する。



顔の動いた場所にスイッチなどを設置できれば、Sさんが顔を動かすことで外界に働きかけることもできると考えた。顔の動きでスイッチを押すこと、そしてSさんにとっても因果関係がわかりやすいのは、スイッチを



押すとすぐに反応がある、何かが動くことではないかと考えた。

そこで、顔を動かしたら届くであろう

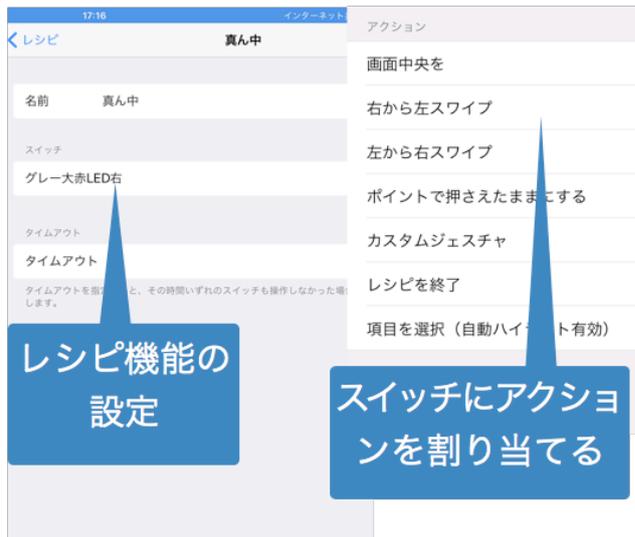
右の頬から1センチ程度の距離にスイッチを設置した。スイッチはプッシュスイッチ、全方向スイッチなど試したが、現段階では



弱い力でも反応するタッチセンサースイッチが良いことがわかった。

スイッチをインターフェイスでiPadにつなぎ、アクセシビリティ機能のスイッチコントロールを設定して、スイッチが押されると動画が再生されるようにした。スイッチインターフェイスは本実践ではBluetoothキーボードに外部スイッチが差し込めるように自作したが、写真のように外部スイッチを接続して有線や無線でiPadやり

とりでできるようなインターフェイスが販売されている。



市販のスイッチインターフェイス



スイッチコントロールの設定

設定は、iPadの「設定」→「一般」から「アクセシビリティ」で「スイッチコントロール」を開く。「スイッチ」を開きスイッチインターフェイスで繋いだ外部スイッチを登録する。「レシビ」機能で登録したスイッチを押した時に「画面中央」をタップするように設定した。そして「レシビを起動」でアクセシビリティ機能が起動した際に、登録したレシビが動作するように設定した。

動画を提示するときには「動画を見るよ」「こっちを向いて」「スイッチ押すよ」と言葉かけをして視界にギリギリ入る位置にiPadを設置した。Sさんは、iOAKの記録からも明らかになったように聴覚的な刺激ではあまり音源の方を向くことはなく、また眼鏡を使用していることや後遺症のためからか視界が狭いため、少しでも視界に入ることで視線を向ける傾向があった。

iPadを提示すると、まずiPadの方に視線を向けて、次に顔も徐々に向けてスイッチを押すことができた。また、センサーのスイッチはクリック感がないのでカチッと音が出るようにした。動画が再生されると画面をととてもよく見ていた。はじめは動画が再生されるのが不思議な様子だったが、実践を繰り返すうちに、iPadを設置しようとするすぐに顔を向けようとするなど顔を動かすと動画が再生できるというのが理解できていると思われるようになった。



外部スイッチで動画を再生

2-3 母親とのやりとり Sさんの見たいもの(家族の動画)を提示するために母親からLINE

で動画を送ってもらう。動画をSさんが動いている様子動画を見ている様子を返信する。



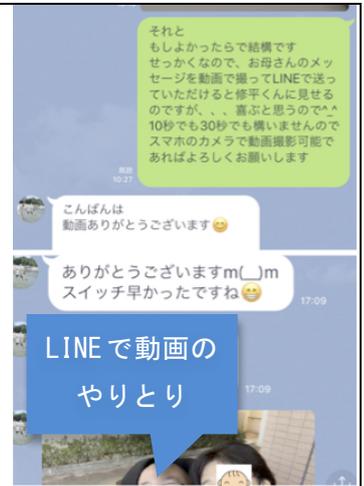
Sさんは、顔を動かしてスイッチを活用することで外界に働きかけることができるようになってきた。そこで、Sさんはスイッチで何ができたら嬉しいだろうなあと考えた。人を呼ぶこと？アニメの動画？またはテレビ番組を見ることだろうか。iOAKの観察から母親やiPadにはとても反応が良いことがわかってきた。本実践ではSさんの顔の動きでスイッチを使用してiPadの動画を再生することができるようになってきたので、それをいかして家族の動画が観れると嬉しいのではないかと考えた。

そこで母親に家族の動画をLINEで送ってもらうようにした。初めの動画は母親とSさんが映った動画だった。Sさんに「お母さんから動画もらったよ」というと目つきが変わり、ニヤッとした。それは「動画をもらったよ」

という言葉を理解しているのか、「お母さん」という単語に反応したのかはわからないが、動画のページを開き iPad を設置するとしっかりと顔を向けてスイッチを押していた。Sさんは再生されるとその動画をじっと見つめてとても嬉しそうだった。

その様子を撮影し、母親に送った。すると母親も「スイッチ早かったですね」などとても喜んでくれ、また動画を送ってくれるようになった。次第に兄弟やお父さん、祖父や親戚の動画などたくさん送ってくれるようになり、動画のやりとりをするようになった。

このやりとりを通してSさんの反応を母親にも伝えて、どのような場面、ものに反応がよく現れるかを共有していくことで、母親も喜んでいて、主体的な働きかけやコミュニケーションにつながって欲しいと言っていた。



・対象児の事後の変化

本実践を通して、Sさんは、顔を意図的に動かすことができるようになってきたと感じる。しかし、それは、Sさんが変化したと言うこともあるであろうが、Sさん自身は私が担任になる前、この実践の前からもわずかではあるが動いていたのだと思う。しかし、その動きを他者に気づいてもらえないなかった。それがこの実践を通して支援者が実践当初より少しだけSさんのことがわかるようになったのではないかと。そして支援しやすくなったのではないかと、どのようなものを提示することができれば動きが引き出せると言った支援する手がかりが見えてきたのではないかと感じることができた。結果としてSさんも笑顔が出るが増えてきたのではないかとということである。

【報告者の気づきとエビデンス】

- Sさんが主体的に動くことができるように、外界に働きかけることができるようになってきたのではないかと。
- 支援者がSさんの動きを客観的に捉えることができつつあることでSさんの笑顔も増えてきたのではないかと。

・主観的気づき

・エビデンス(具体的数値など)

Sさんが家族の動画を見ている時のiOAKの画像を右に示す

ここではビフォー、提示する、提示中、アフターの4コマを撮影している。ビフォーでは動きはないが、iPadを提示すると動画を見ようと顔を動かしているのがわかる。そして動画を見ているときは動きが減っていることからしっかりと動画を見ているのがわかる。さらにアフターでは見終わって、iPadを無くすと顔を正面に戻そうと動いているのがわかる。この画像からもSさんが興味のある、興味の持てる刺激して、視線や顔を向ける必要性を感じることができれば意図的に顔を動かすことができるようになった。また、スイッチを押すことで動画が再生でき、Sさんがじっと見て楽しんでいることがわかる。

動画を提示した時のiOAKの画像

| | ビフォー | 提示する | 提示中 | アフター |
|-----------|------|------|-----|------|
| お父さんの動画 | | | | |
| おじいちゃんの動画 | | | | |

動画の方を向く
しっかり見ている

隣接するセンターとのケース会議での看護師長さんや、リハビリの先生も「顔を動かすことがわかるようにな

った。」「笑顔が増えてきた」と言ってくださっていることから情報共有することでSさんが興味を持てるものを提示されたり、多くの人とかかわったり（支援者がかかわり方がわかりやすくなってきた）することで笑顔が増えてきているのではないだろうか。

・その他エピソード(画像などを含めて)

・母親と動画をやりとりする中で、Sさんが意欲的に活動に取り組めるならとお父さんが仕事で出張に出かけた時に自分で動画を撮影して送信してくれたことがあるなど、家族全員Sさんが主体的に動いていることを喜んでくれている。

・Sさんにどのように支援すれば顔を動かすなど主体的な動きが見られることが共通理解できたことで、学部の他の教員もスイッチを使って動画を見る取り組みを始めるようになってきている。また、Sさんが顔が動いたり笑顔がでることがわかるようになってきたことで、学部の先生が以前より多く話しかけてくれるようになり、Sさん自身もそれに顔をしっかり向けたり笑顔で返すことができつつある。

・2学期の後半から、母親が仕事の関係で毎日の面会には来られなくなり、1学期まではほぼ毎日入院するセンターにお見舞いに来ていたのが、その回数が減少した。これは母親の仕事の関係からであるが、19歳という年齢や母親の負担を考えると決して毎日面会に来ることがベストではないと私は考える。本実践での動画のやりとりを通して毎日面会に来ることができなくてもSさんの頑張りの姿や自分で動いている姿を動画で見ることができるようになったことで母親も少し安心ができたのではと感じている。面会に来る回数が減ったことも少しは関連しているのではないかと感じている。

・今後の方向性・取り組んで見たいこと

この実践ではSさんが興味のあるものを提示して、必要性を感じることができれば、ある程度意図的に視線や顔を動かすことができることがわかった。一方で以下のような困難さや課題もあり、より実践を進めて行くためには以下のような点からも取り組んでいかなければいけないと考える。

①言語理解の困難さ Sさんに興味のあるものを提示するとき、また、顔を動かした時にそれをフィードバックしてやりとりを行う上で、Sさんがどの程度言語を理解しているのかを探っていく必要がある。中途障がいの方の難しさでもあるが、事故になるまでは、通常の発達、生活を送っていたのでその時点までの言語理解はあるはずである。そのあたりをより明確にして行くことが反応を探っていく上で重要と考える。

②覚醒コントロールの困難さ Sさんがいつでも動きが出るわけではない。薬の影響で覚醒状態が低いときもあり、午後の活動は寝ているときも多い。リハビリの先生の話では反応が良いのは20分ほどとも言われている。今後は、他の要因や環境をより一層整理して行き、覚醒の良い時間帯に重点的に取り組むなどして行きたいと思う。

③感覚入力の困難さ Sさんは、後遺症障がいから、首から下の感覚も困難さがある。本実践では顔の動きもまだわずかなためタッチセンサーのスイッチを使用した。センサーでは、今度はスイッチを押したと言う実感をSさんが感じにくいと考えられフィードバックしにくい。スイッチ等を活用する際には、よりSさんが動きを実感できるような装置（スイッチを押すことで振動する等）を検討して行く必要がある。

④注意を向け続けることの困難さ 本実践では、動画の提示を行ったり、よりSさんが興味を持てるように母親から家族の動画を提供してもらったりするなどを行った。しかし、前述の覚醒状態が継続しないことも関連して持続して注意をする（見続ける）ことに困難さがある。合わせて、顔の動きを引き出すために体の斜め側面にiPadなどの提示を行ったが、そのこと自体が持続して注意を向ける場合には困難さになっていることも考えられる。より興味を持てるコンテンツや姿勢も含めて検討して行きたい。

⑤選択的注意の困難さ 今後はスイッチ等を活用してオンだけでなくオフもできるようになることや、2択につなげていきたいと考える。その際に有効な手立てとして視線での入力も検討して行きたいが、④にも関連するが、狭い

範囲で2つの物から一方を注意してみることは難しい様子（画面が小さいと視線が一度見ても画面から視線が外れてしまう）である。今後、視線入力を含めて2択などの選択に繋げて行く場合でもある程度大きな画面を用意することや、選択しやすいように選択肢や入力するもの以外はできるだけ視界に入らないような環境作りも必要である。

⑥表出の困難さ Sさんは笑顔が見られることが多くなったが、口元のあたりが動く程度であり、表情の変化は一般的には依然読み取りにくい。また、本実践では笑顔や視線、顔のわずかな動きは引き出せたが、顔の動く箇所にスイッチを設置したが、Sさんの覚醒状態によってスイッチを固定する場所は毎回、微妙な調整が必要であった。また、首から下の有為な動きは現段階では難しかった。今後も反応や動きが見られた箇所は強化して行き、一方で他に有効な手段はないか模索して行きたい。

•おわりに

この実践を進めることを母親は喜んでくれている。その反面、本当の願いは「Sさんの声が聞きたい」ことである。Sさんの回復を願い当然ではあるが現状に決して満足しているものではない。今はまだSさんの動きで好きな動画が再生されるだけであるが、実践を通して、母親や家族の気持ちに寄り添いながらも、他の方法や代替手段でSさんがコミュニケーションやアクションに繋がるように支援していきたい。例えばVOCA等を活用することで肉声ではなくてもSさんが自分のアクションで「お母さん」と呼ぶことも可能になってくると考える。母親や支援者がより観察や普段のかかわりを通してSさんのしたいこと・伝えたいことをより理解していけるように支援していきたいと思う。